



天文同好會觀測部月報

觀測部流星課報告 Report, Meteor Section (26)

課長 小槇孝二郎 (K. Komaki)

1930年10月中の觀測者及觀測數は次表の通り. Summary for October, 1930

觀測者 Observer	略符 Abbr.	觀測地 Locality	時間數 Duration	個數 No.	觀測者 Observer	略符 Abbr.	觀測地 Locality	時間數 Duration	個數 No.
田中鐵馬	Ta	福岡縣箱崎	1330	75	鹽見桂三	Sk	京都府 福知山	85	155*
八幡修一	Yw	長野縣平野	420	63	豐田博吉	To	東京府 矢口		2
荒木健次	Ar	岡山縣玉島	395	47	宮澤堂	Mz	花山天文臺	685	77
大橋登潮	Oh	廣島市	30	3	木邊成磨	Ki	滋賀縣中里		1
宮本正太郎	My	姫路市	230	29	淺野英之助	As	鳥根縣 津和野	180	7
長谷秋男	Ng	廣島市	245	111*	山田 頁	Yd	山口縣小郡	300	6
窪田繁夫	Ku	京都府 福知山	254	306*	原田參太郎	Ha	大分市	560	155*
鹽見幸三	Sh	京都府 福知山	232	762*					

總觀測時數 Total Duration 4946m.

總觀測個數 Total No. 1799個

* 微光流星の觀測

新觀測者が續々輩出するに至つた事は 誠によるこばしい。微光流星の方
も長谷君、原田君が新に参加され大いに奮闘されるは甚だ心強い。原田君
は特に小望遠鏡（口径 3cm, 3×, 視野15度のもの）で流星觀測をこゝろみ
られてゐる。

この部門も追々整然たる統一がつくことと思ふ。

1. 觀測の概略 (Daily Summary of Observations)

日付 Date	觀測者 Obs.	觀測時數 Duration	觀測數 No.	日付 Date	觀測者 Obs.	觀測時數 Duration	觀測數 No.	日付 Date	觀測者 Obs.	觀測時數 Duration	觀測數 No.
3	Ku	48	47	14	Ta	60	2	21	Yd	60	1
〃	Mz	60	9	〃	Ha	70	23	22	Yw	* 90	11
5	Ng	*60	32	15	Sh	25	95	〃	Ng	* 60	30
〃	Ta	60	1	〃	Ta	90	5	〃	Ha	* 40	13
6	Sh	30	62	〃	Ar	50	5	〃	Mz	60	11
〃	Sk	15	44	16	Yw		1	〃	Yd	60	1
〃	Ta	60	1	〃	Ki		1	〃	Ta	60	6
7	Ku	36	36	〃	Sh	7	24	23	Yw	*120	27
〃	Sh	30	82	〃	Mz	60	9	〃	Ar	*105	23
〃	Sk	10	35	〃	Ha	50	34	〃	Ta	30	1
〃	Ku	31	54	〃	To		2	24	Ha	*150	17
〃	Ta	30	0	〃	Ta	60	3	〃	Ta	60	6
8	Sh	35	122	17	Ta	* 150	11	25	Sh	20	65
〃	Ku	35	64	〃	Mz	60	8	〃	Ha	35	12
〃	Ta	30	0	〃	Yd	60	2	〃	Ta	60	4
9	Ta	30	0	〃	Ha	80	24	26	As	120	5
11	Ta	60	1	〃	Ar	70	6	〃	Ta	60	4
12	Sh	30	111	〃	Ta	60	5	27	Ar		1
〃	Sk	60	76	18	Yw	* 90	7	〃	Mz	25	4
〃	Ku	52	62	〃	Yd	120	2	28	My	50	7
〃	Mz	60	5	〃	Ar	70	5	〃	Oh	30	3
〃	Ta	40	0	〃	Ta	60	2	〃	My	60	11
13	Mz	60	5	〃	Ta		3	〃	Ar	* 75	6
〃	Sh	35	147	19	Ta	* 210	20	29	Ku	52	43
〃	Ng	60	14	〃	Yw	* 120	17	〃	Mz	60	4
〃	Ar	25	2	〃	Ng	* 65	35	〃	My	60	7
〃	Ta	60	0	〃	Ha	* 100	20	30	My	60	4
14	Mz	60	15	20	Ha	* 35	12				
〃	Sh	20	54	21	As	60	2				

* 印は夜半後の觀測で觀測時間數なきは時間外の觀測である。微光流星の觀測者は Sh, Sk, Ku, Ha, Ng の五氏である。一般に微光流星の觀測數は出現數を示すものとは考へられないから、其日の流星出現の多寡は他の觀測者の觀測數に依つて窺ふのが適當である、夜半後の觀測數は一般に多數であることは上表にても推知し得るが、今一層觀測者が夜半後に努力を

注がれると收穫が多からうと思ふ。

2. 十月中に觀測されたる大流星 (Bright Meteors Observed in Oct. 1930)

日付 Date	觀測者 Obs.	出現時刻 Time (J.C.T)	確度 Wt.	繼續時間 Duration	光度 Magn.	速度 Velocity	色度其他 Colour &c.	出現點 Appearance		消滅點 Disappear		流星詳 Swarm
								α	δ	α	δ	
3	Mz	22 8	2	0.8	-3	M	wB Curve	221	+62	218	+54	
15	Ki	20 30±5	1s?	>	-4	vS	Orange?	301?	+18?	296	+14	
16	Ha	23 52	2	2	-2	rS	B	29	-1	23.5	-15.5	e-Arietid?
20	„	3 17	4	2	Jup.	M	B 痕	127	+0.5	109	-16	
28	Ar	4 5	3	0.5	-2	rR	B 痕 (4s)	181	+57	182	+45	
29	Mz	19 22	3	1.3	-2	S	w→R	48	+57	57	+68	e-Arietid?

3. 流星群の出現狀況 (Note on apparitions of Swarms)

I. オリオン座流星群 (Orionid)

此の流星群は Denning に依つて 停止輻射點なることを提唱され、其後 Olivier 等によつて輻射點の移動性を云々せられてゐる流星群であり、且又 ハリー彗星と關聯せるものなりと論ぜられてゐる流星群である。本年度は Yw, Ha, Ng 等の人々によつて觀測されたが、其出現程度は1928年の時とあまり差異はなかつた様である。(1929年度は月明の爲觀測不充分であつた。)

今輻射點について論ずれば、流星群がハリー彗星と同速度を有し、流星群の各部分が平行運動をするものとすれば、16日から25日迄の10回に赤徑は約3度ばかり東方に移動する筈である。米國にては1922年に Dole 及び Mc Intosh 等によつて東方移動を觀測されたが移動の量は可成多く、Dole は17日の $\alpha=90.7$ $\delta=+15.0$ より29日の $\alpha=102.8$ $\delta=+19.8$ まで移動するものと觀測して居り、Mc Intosh は15日の $\alpha=+89.2$ $\delta=+14.2$ より24日の $\alpha=99.4$ $\delta=+13.7$ まで移動するものと見てゐる。長谷君は19日に $\alpha=+88.2$ $\delta=+12.5$ と觀測し22日には $\alpha=92$ $\delta=+14$ と觀測してゐられるが、今少し不充分と思ふ、この方面には微光流星觀測者の努力すべき分野が大いにあらうと思ふ。猶此の附近の天空は地球運行方向に近い爲確率の上から輻射點は多數ある筈であるから一屬天空搜索の要があらう。

此時期に出現する双子 γ 群 (γ -Geminid) は今回はあまり見られてるない様である。

II 其他の流星群 (Other Swarms)

長谷君及び新進の淺野君の觀測中に牧羊座 α 流星群 (α -Arietid) が見られてる外特に記すべき流星群の出現はなかつた様である。

鹽見君一派の微光流星觀測も着々成績を揚げてゐられる。

4, 觀測より誘導したる輻射點

(Radiant point derived from observations)

番 號 Curr. No.	Time (J.C.T.)	輻 射 點 Radiant Pt.		個 數 No.	觀測者 Obs.	備 考 Remarks.
		R. A.	Decl.			
597	Oct. 17.06	92	+ 2	5	Ta	
598	19.08	017	+ 5	5	Ta	lon17d
599	22.88	93	+13	4	Yw	Orionid
600	23.10	98	+16.5	10	Yw	γ -Geminid
601	23.10	91	+15	6	Yw	Orionid
602	23.15	121	+10	8	Ar	β -Canerid
603	26.88	30	+24	4	As	α -Arietid

以下は微光流星觀測による輻射點である Radiant Points from faint meteors

A. Ha の得たるもの

Time (J.C.T.)	番號 Curr No.	Rad. Pt.		個數 No.	番號 Curr No.	Rad. Pr.		個數 No.	番號 Curr No.	Rad. Pt.		個數 No.
		α	δ			α	δ			α	δ	
14.90	604	30	+22	7*								
16.89	605	32	+22	9*								
17.89	606	32.5	+22	8*								
19.08	607	91.5	+15	9 Δ	608	112.5	+22	9				
20.14	609	91	+15	9 Δ								
25.97	610	65	-8	8								

*= α -Arietid Δ =Orionid

B. Ng の得たるもの

5.15	611	83.5	+3	7	612	68.5	+17.5	6				
13.89	613	307.5	+43	6								
19.11	614	88.2	+12.5	16	615	50.3	-14	6				
22.12	616	86	+9.5	12	617	92	+14	7	618	98	+20.5	7

*=Orionid

- C. 鹽見君等の得られた輻射點の總數は下記の如くであるが、其位置は省略さしていたとく。

Sh	46個	No. 619—No. 664
Sk	5個	665—669
Ku	12個	670—681

彗星課月例報告

柴 田 淑 次

前月號に、豫報した所の、今年歸つて来る彗星の中、エンケ彗星は、今年の B. A. A.—Hand book によれば、其近日點通過は、本年六月四日になつて居る。之れは、御承知の通り、エンケ彗星と木星と土星とが、約五十九年半毎に、殆んど同じ關係位置に、立ち歸り、従つて、木星と土星とが、エンケ彗星に及ぼす攝動が、殆んど五十九年半毎に同じであると云ふ事實に基いて出されたものである。此の彗星の、天球上の豫報位置は、本會ブレテン號に掲載されて居るから、御覽あり度い。本年のエンケ彗星は、我々北半球の觀測者達には、近日點通過以前が、かへつて觀測に便利であるから、一月末より、二月にかけて、ほつほつ搜索すべきである。尙其時分は、彗星は、夕暮の空にある筈である。

次に、ニウジミン彗星については、近日點通過は、本年五月七日となつて居る。豫報位置や、詳しい事は、次號に譲る。

それから、此れは、今年、近日點を通る彗星ではないけれども、1918 III 即ち、Schorr 彗星と、1924年末に發見された、Wolf の第二彗星とが、本年末に觀測されるであらう。と云つても、Schorr 彗星の方は、1925年に歸つて來た時、發見されずに終つたから、今度の豫報は、相當の狂ひがあるかも知れない。又、Wolf 第二彗星の方は、光度十七等と云ふのであるから、肉眼でやる一般觀測者にはチト小さ過ぎる。故に、此等二つは、何れも可なり難物で、大衆的對稱物ではない。